

変貌する狐憑き伝承の類型と諸相

— 近世随筆と近代口頭伝承における計量的比較考察 —

程 亮

Types and Variations of *Kitsunetsuki* in the Heritage of Japanese Folklores

— A Statistical Comparative Study Based on Essays in Early Modern Periods and Oral Traditions in Modern Times —

CHENG Liang

Abstract

Since ancient times, Japanese people have believed that people could be overtaken by strong emotions such as *Kitsunetsuki* (possessed by a fox spirit). Through the investigation of the heritage of this folk belief in *Kitsunetsuki*, Japanese traditional values and intellectualities can thus be grasped. Based on the oral traditions in modern times, which have been obtained from the Kaii-Yokai Densho Database made public in the International Research Center for Japanese Studies, this essay taking statistical folklore methodology is an attempt to conduct a statistical study of *Kitsunetsuki* records in early modern periods and modern times, conduct a comparative analysis by correlating the types of *Kitsunetsuki* with other factors such as regional distribution, temporal distribution and the cult of *Inari*, and consequently elucidate the different types of this fox belief in early modern periods and modern times. In early modern periods, this fox belief, in combination with *Inari*, circulated in the form of the cult of *Inari*; in modern times during periods of great social and economic reform and heightened public apprehension, the cult of *Inari* faded away, and this fox belief, in its combination with the belief in spirits possessing human beings, took on the form of belief in *Kitsunetsuki*. In this way, the fox belief varies with Japanese people's aspirations and social demands, as do its images and modalities accordingly.

キーワード：狐憑き伝承、近代口頭伝承、稲荷信仰、流行神、計量民俗学

Key words： *Kitsunetsuki*, oral traditions in modern times, the cult of *Inari*, popular gods, statistical folklore

1. はじめに

日本において、狐にまつわるさまざまな伝承が残されているが、その中で、人間に狐の霊力がとり憑くという伝承は遠い昔から近代まで信じられてきた¹⁾。「狐憑き」という独特な伝承は、その研究を通して日本の伝統的な価値観や意識の特質が捉えられると思われるので、本稿の研究テーマとして取り上げた。

従来、「憑きもの」については、民俗学を中心に多くの研究が積み重ねられてきた。その研究の大要は柳田国男（柳田 1948、1949、1955、1969[1954]、1970[1920]、1998[1939]、1999[1913]、1999[1914]）によって示され、石塚尊俊（石塚 1990A、1990B、1999[1959]）によって集大成された。また、社会経済史的立場から速水保孝（速水 1999[1956]）の研究がある。人類学的な研究としては、吉田禎吾（吉田 1972）と小松和彦（小松 1979、1982、2000）等の研究が挙げられる。

「狐」の文化については、文学に現れる狐伝承に関する星野五彦（星野 1995）の考察がある。中村禎里（中村 2001、2003）は日本の狐伝承の歴史的成立過程や伝播の経緯を明らかにした。また、山田奨治（山田 2006）は、国際日本文化研究センターが公開する「怪異・妖怪伝承データベース」²⁾（妖怪 DB）と日本野生生物研究センターの調査を組み合わせ、計量的に狐伝承におけるポピュラーな動物の特異性を見出そうと試みた。

上述の優れた研究成果を継承しさらに新しい知見を加えるのは容易なことではないが、本稿では、山田氏が指摘した計量民俗学という研究スタイルを試みてみたい。計量民俗学に関して、氏は次のように述べている³⁾。

文化的なことの計量となると、民俗学では当たり前とされている研究態度とは、かなり違ったスタイルが要求される。それどころか、民俗学で大事にしてきたようなことを、ぱっさりと切り捨ててしまわなければ、適切な計量ができないこともある。たとえば、民俗学は、個別的な事例を深く追求することに価値をおく。しかし事象を計量的にみる場合には、個別的な事例にはあえて注目しないで、全体的な傾向に重きをおいてデータをみる。さらには、全体的な傾向を攪乱するような要因がみいだされたら、事例の多寡にかかわらず、それらを排除して考えることもある。こういった研究スタイルは、民俗学にはなじまないだろう。しかし、それをやってみないとわからないことがある限り、計量をしてみる価値があると、わたしは信じている。

計量民俗学的な研究の試みとして、本論では、近代の狐憑き伝承を探る方法として、妖怪 DB を活用しながら、近世随筆と近代口頭伝承における狐憑き事例について計量的な比較考察を行うことによって、近代の狐憑き伝承の諸相を明らかにしたい。

2. 研究方法

本稿では、近世随筆と近代口頭伝承のデータを用いて、近世と近代の狐憑き伝承の比較考察を試みたい。近世随筆のデータは、中村禎里の考察⁴⁾に依拠する。近代口頭伝承のデータは、妖怪 DB (第1.4.3版)⁵⁾ から抽出したものである。

妖怪 DB に収録された狐憑き事例の多くは、フィールドワークにより、実地に採取された「はなし」(伝説・世間話・体験談)であり、民俗学の一分野である口頭伝承とされるものである。口頭伝承の資料を使用することは、人びとの心に抱いた観念を考察するという点で、純粋な創作や不正確な伝聞が大部分を占める近世随筆類より適切だと思われる。

妖怪 DB を使用する利点は、狐憑きに関するデータ数がもっとも多く、かつ網羅的である点にある。筆者は、国際日本文化研究センターより妖怪 DB の使用許可を得て、妖怪 DB のデータを再構成し、「近代口頭伝承における狐憑きデータベース」(狐憑き DB)を作成した。また、妖怪 DB 掲載のテキストのデータは要約であるため、国際日本文化研究センター妖怪プロジェクト室において原典調査を行った。

なお、狐憑き DB の作業過程は以下ようになる。まず、妖怪 DB からキツネという呼称のある1557個のデータを抽出し、「狐伝承データベース」(狐 DB)を作成した。狐 DB の各項目は妖怪 DB に準拠したもので、データベース番号・要約・発生地域・呼称・執筆者・論文名・書誌名と巻号・発行所・発行年・話者(引用文献)の順になっている。そして、以下のようなデータを狐 DB から削除した。

- a. 各項目が重複するデータ
- b. データベース番号以外の各項目が重複するデータ
- c. 同一事例のデータ
- d. 要約が不十分で内容を把握できないデータ
- e. アイヌのデータ
- f. 近世のデータ(『日本随筆大成』と『続日本随筆大成』を含む)

最後に、狐 DB に基づき、狐憑きに関する375件のデータを抽出した。

中村禎里は近世の狐憑き事例の考察において、狐憑き事例の類型を A1型、A2型、A3型に分類した⁶⁾。A1型は狐が自分の都合で憑いた類型⁷⁾、A2型は狐が人から迫害を受けて報復するために憑いた類型⁸⁾、A3型はその他のケース、及び狐憑きの動機不明の類型⁹⁾である。本稿では、狐憑きに関する375件のデータに基づき、中村禎里の分類法を援用して、狐憑きの類型と地域分布、稲荷との関連、年代分布という視点から近世と近代の諸相と比較しながら、分析を展開していく。

3. 結果および分析

3.1 狐憑きの類型と地域分布

まず、近世、近代の狐憑きの類型と地域分布の関連性を考察する。表1は、中村禎里が近世の狐憑きの型と地域分布との関連をまとめた表である。中村禎里は、狐憑き事例の地域を東国

表1 近世の狐憑きの型と地域分布

	A1	A2	A3	計	A1/A2
東国	26	12	26	64	2.2
(江戸)	(21)	(7)	(13)	(41)	(3.0)
西国	6	12	6	24	0.5
不明	1	0	3	4	
計	33	24	35	92	1.4

(中村禎里 (2003)『狐の日本史』より引用)

と西国に分けて、越後・信濃・尾張以東を東国とし、越中・飛騨・美濃・伊勢以西を西国としている。これと一致させるために、近代の狐憑きの型と地域分布との関連をまとめた表2は新潟・長野・愛知以東を東国とし、富山・岐阜・三重以西を西国とする。

表1を見てみよう。A1型の場合、狐憑きの事例数は東国では26件（そのうち江戸は21件）、西国では6件である。A3型の場合はA1型と全く同じ結果で、東国では26件（そのうち江戸は13件）、西国では6件である。A1型とA3型の両方とも、東国の狐憑き件数が西国の4倍に達する。A2型の場合は東国と西国、両方とも12件である。近世の狐憑きは西国よりも東国とくに江戸においてしばしば発生し、A2型の狐憑きに限って、東国と西国における事例数は等しい¹⁰⁾。

表2をみると、近代においても、地域的偏差は近世と同様の傾向がみられる。A1型は13件ある。そのうち、東国では8件（そのうち東京は1件）、西国では5件である。A3型の場合はA1型より発生数が大幅に増加し、東国では85件（そのうち東京は7件）、西国では41件である。A1型とA3型両方とも東国の狐憑き件数が西国の2倍に達する。A2型の場合は東国と西国両方とも10件あり、近世と同じく東国と西国における発生数は等しい。そのうち、江戸における狐憑きは1件もない。表3をみればわかるように、近代の狐憑きは、近世と同じく、西国よりも東国においてしばしば発生する。しかし、東国に発生する狐憑き事件は、近世においてとくに江戸で多く発生するのに対して、近代では東京で発生することはきわめて少ない。

近世の狐憑きが西国よりも東国、とくに江戸に多いことは、中村氏が指摘したように、近世随筆の筆者の多数が江戸に居住するため、江戸の事件が偏って多く記載されたというデータの基本的性格による¹¹⁾。一方、近代口頭伝承のデータは東京に限らず全国の各地から採取された

表2 近代の狐憑きの型と地域分布

	A1	A2	A3	計	A1/A2
東国	8	10	85	103	0.8
(江戸)	(1)	(0)	(7)	(8)	/
西国	5	10	41	56	0.5
不明	0	1	5	6	
計	13	21	131	165	0.7

ものであるため、東京の事例が全体に占める比率はわずか4.8%であり、近世の44.6%に比して顕著に少なくなる。

A1型とA2型の比をみると、近世において、東国ではその比（A1/A2）は2.2で、狐自己都合の憑き（A1型）が圧倒的に優勢であり、西国ではその比（A1/A2）は0.5で、人への復讐のための憑き（A2型）が多数を占める。中村氏は、その原因を、東国では中世にすでに神狐信仰が始まっていて、近世になると、江戸を中心に神狐が稲荷と結託し、人びととの交渉を日常化し、その過程で狐はおのずから人に憑いたためとしている。他方、西国では、一部を除くと中世までは妖狐の俗信が強く、中世末期になって妖狐も信仰の対象へと変身した。その過程で妖狐性を保ちながら、狐は人への復讐のため憑いたと述べている¹²⁾。

これに対して、近代において、東国ではA1型とA2型の比は0.8で、人への復讐のための憑き（A2型）がやや優越し、西国では、その比（A1/A2）は近世と同じく0.5で、人への復讐のための憑き（A2型）が多数を占める。近世と比較すると、西国において、近代は依然として人への復讐のための憑きが多数を占める。これは、近世の妖狐信仰が西国地域の人びとに受け継がれ、近代に伝承されたと推測できる。一方、東国においては、近世は狐自己都合の憑き（A1型）が圧倒的に優勢なのに対して、近代は自己都合型の優位性が見えなくなるのである。では、なぜ近代の東国は近世と異なる状況にあるのか。その原因を狐憑きの型と稲荷との関連の比較から見てみる。

3.2 狐憑きの類型と稲荷信仰との関連

狐と稲荷との関連は古いもので、狐神の信仰が原初的なものであった。動物霊としての狐は、託宣するカミとして信じられていた。狐憑きという現象は、動物霊の狐が人間にのり移って、託宣を述べることを本義としていたのであり、以前、人々は狐憑きが現れることを望み、その託宣によって、当年の豊作の予告を期待していたのである。このように、狐の託宣が田の神に同一視され、各地域において、狐神と田の神が習合化するようになり、稲荷信仰が成立したのだと思われる¹³⁾。

近世・近代に入って、狐憑き伝承も稲荷信仰もその変貌を見せていたが、近世と近代における狐憑きと稲荷との関連を表3と表4にまとめて考察する。

表3を見ればわかるように、近世の場合、A1型の33件のうち12件、つまり3分の1以上が稲荷祠の建立を要求するため、狐が人の口を借りた事例だった。中村禎里は、それは稲荷社の不在またはその破損を気にしていた者の潜在意識が表面に出たのだらうと推測し、A2型で稲

表3 近世の狐憑きの型と稲荷との関連

	A1	A2	A3	計	A1/A2
関連あり	21	9	5	35	2.3
関連なし	12	15	30	57	0.8
計	33	24	35	92	1.4

（中村禎里（2003）『狐の日本史』より引用）

表4 近代の狐憑きの型と稲荷との関連

	A1	A2	A3	計	A1/A2
関連あり	0	4	3	7	/
関連なし	13	17	128	158	0.8
計	13	21	131	165	0.7

荷と関連する事件が9件あるが、その大部分はA1型の場合の裏返しであると指摘している¹⁴⁾。稲荷祠を傷つけ、または破壊した行為に対する報復のために狐が憑いたのである。近世の狐憑きは、A1、A2という型に関わらず、稲荷の建立、及び稲荷祠の悪い状態（不在、破損、破壊）への懸念がその根底にあるという点に、特徴がある。

表4を見てみると、近代の場合、A1型の13件のうち、稲荷祠の建立を要求するため、狐が人に憑く事例はないが、狐を落とすために、稲荷と関連する事件は3件ある。ここでは、『山陰民俗』に収録された事例¹⁵⁾を見てみよう。

宮持の狐はその他川居の春子という娘に憑いたことがあり、例のごとく訊問すると、何十年となくいる狐が、雪で寝屋を崩されて棲む処がなくなったので、娘に憑いて住もうと思うと云った。稲荷に祀るから離れろと云って明朝、むすびを作って送出した処離れたという。

狐が住む処がなくなり、娘に憑いたので、稲荷に祀ることによって狐を落としたという事例である。また、狐が娘に憑いて饅頭を食いたいといったので、その狐を落とすため稲荷へ油と油揚げを供えたという事例がある¹⁶⁾。嫁の歌に惚れて取りついた狐を落とすため、家の者が京都の伏見稲荷の御符を戴いて帰る事例もある¹⁷⁾。以上の3例は、狐が憑く目的が稲荷の建立を求めることではないものの、依然として稲荷信仰と関連している。稲荷信仰の中で、稲荷を祀ることは重要な要素である。稲荷の御符を戴くことや、稲荷に供物をするのは、いずれも稲荷を祀る行為である。そして、稲荷を祀る行為の中で、もっとも積極的な行為は稲荷社の建立だと考えられる。しかし、稲荷の御符を戴くことや稲荷に供物をするのは、稲荷社の建立と比べて、同じ稲荷を祀る行為であっても、その積極性において及ばない。近世と近代の稲荷への関与は積極性の度合いが異なる。稲荷社を建立する行為に対して、近代では、近世のような稲荷に積極的な関与がみられなくなる。

近代のA2型の場合、21件のうち、稲荷と関連する事件はわずか4件である。船に祭った神田稲荷を網にかけた、または家に祀った稲荷さんのホコラを捨てた行為に対する報復のために狐が憑いたという話は2件あるが¹⁸⁾、人びとの稲荷への関心が足りないことに対する不満のために狐が憑いたという話も2件ある¹⁹⁾。まず、『岡山民俗』に収録された小判繁樹の報告を要約する。

55歳の女性が精神異常の状態となり、こんがらさまにやってきた。女性は「道でうかう

かしているから憑いてやった。7匹の子供がいるからおなかがすく」などといっているため、狐憑きと判断した。憑いた狐は刈田稲荷で、「祭り手がないからこうなった」という。油揚げをもって刈田稲荷まで行列をし、御祈りをして、家に帰って加持祈禱をしていると女性は正気に戻った。

狐は祭り手がないため、女性に憑いたという話である。また、『民俗』に収録された畠山正寿の報告を見てみる。

母と同じ年ごろの原吉という男が、船岡町に配達にいき、夜遅く川辺のススキ原を通りすぎた処、後から誰か急いで来るのに気づいた。それは村人でない美しい女であった。尋ねると槻木へ行こうと思っているというので、気の毒に思い叔母の家に連れていき宿を頼んだ。叔母は早速承知して茶を進めたが遠慮して一向に飲まないのので先に休むよう言い、一寸目を離れた僅かの間に女はもう床についていた。変なことと思ったが翌朝叔母が起きたとき女はもういなかった。原吉も泊まったが、それから寝込んで三日目ごろ突然わけのわからぬことを口走り、毎晩暴れ廻り、犬は外で吠え廻り、原吉は狐の啼きまねをしてゲンゲン（女狐の声、男狐はケンケンと啼く）と飛び廻った。そして俺はな、この家の護り神だぞ、俺のいう通りしなければ、鎌で家の者一人残らず首を刈り切るぞといい、戸棚の食物を一々いい当て、田圃の畦道の辻へワラ苞にのせて供えてこいとわめいた。信心者にみて貰っても癒らず困り果てて安国寺の僧に頼んだ。坊さんは原吉を生杉の薬でいぶし「お前はどこから来たか」というと、「俺はこの家の護り神だ。この庭に来て七十五年になるが誰も顧みないので長男にとりついて思い知らせるのだ。玄関西側の石祠を建て直して祭れ」という。それで「必ず一月十五日に祭るから離れるか。よければ声をあげて出ていけ」といった処、ゲンゲンと障子に大穴をあけて出ていった。原吉はぐったりして二、三日寝込んだが、やがて恢復し稲荷を新しくして祭った。以後商売繁盛した。

家の護り神として75年間誰も顧みないことに対する恨みのため、狐が家の者に憑いた話である。この事例は前の小判繁樹の報告と異なる。前者は稲荷祠を傷つけ、または破壊した行為に対する近世の報復の事例と類似する。稲荷社の不在またはその破損を気にしていた者の潜在意識が表面に出たものといえるが、後者の事例は稲荷社への関心が減少することを懸念していた者の潜在意識が表面に出たものであり、近世には見られない新たな懸念が出現したのである。換言すれば、近世の狐憑きは、人びとが稲荷祠の建立を要求し、その不在または破損に懸念することによって生じたものである一方、近代においては、建立要求が消滅し、人びとの稲荷信仰に対する関心が減少する懸念から生じたと思われる。

なぜ近世において、人びとは稲荷祠の建立を要求するのだろうか。それは、稲荷信仰の流行神としての性格にあると思われる。近世において、稲荷は江戸を中心として、きわめて盛んであった。流動性が激しい江戸の住民は、その身分・立場の多様性によって、信仰する稲荷もさまざまである。その中、とりわけ参詣人を集めた稲荷として、王子、真崎、三囲、妻恋、市谷

茶木稲荷、浅草田圃太郎稲荷、赤坂大岡侯御下屋敷豊川稲荷などがあげられる。そして、各町内・各屋敷に祀った稲荷は町・屋敷の変更によって、その入れ替わりも激しくなり、廃る稲荷もあれば、流行る稲荷も次つぎに現れる²⁰⁾。このような状況の中、近世の資料に、狐が人の口を借りてよく稲荷祠の建立を要求する事例が数多く現れたのだと考えられる。

また、近代においては、近世のような稲荷への積極的な関与が見られなくなる。これは、稲荷信仰が近世から近代へ引き継がれたとき、人々に捨てられたためであろうと推測される。宮田氏が指摘したように、突発的に流行り出して、一時期に熱狂的な信仰を集め、その後急速に信仰を消滅させてしまう神々が日本の民俗信仰の中にはずいぶん見られる²¹⁾。宮田の説は、妖怪 DB からアプローチした本論の結果と、基本的に変わらない。

3.3 狐憑き事例の年代分布

最後に、近世随筆と近代口頭伝承の狐憑き事例数の年代分布を見てみよう。図1は中村禎里が集めた近世随筆・記録・説話集における狐憑き事例²²⁾を元に作成した年代分布図である。19世紀のはじめからから20年代までの30年間、40年代から50年代までの20年間において、狐憑きの事例数が顕著に集中する。

図2は妖怪 DB のデータを元に作成した年代分布図である。1920年代から30年代まで、1950年代、1980年代に狐憑き事例数が集中していることがわかる。

さらに、1800～20年代、1840～50年代、1920～30年代、1950年代と1980年代の狐憑き事例数を狐憑き類型別にまとめると、表5になる。近世の1800～20年代において、A1、A2、A3型の事例数はほぼ同じであるが、40、50年代に入ると、A2型が明らかに減少している。近代において、A1とA2型的事例数は極めて少ないのに対して、A3型的事例数は圧倒的に多い。また、

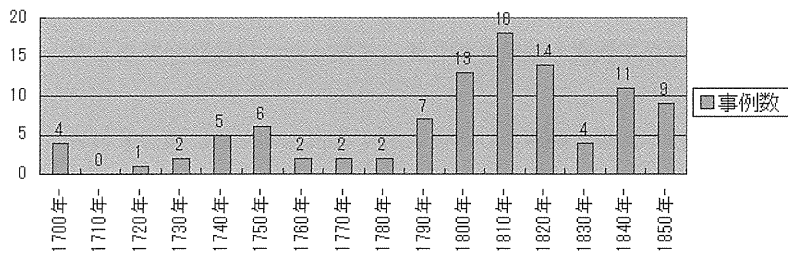


図1 近世随筆にみる狐憑き事例数の年代分布

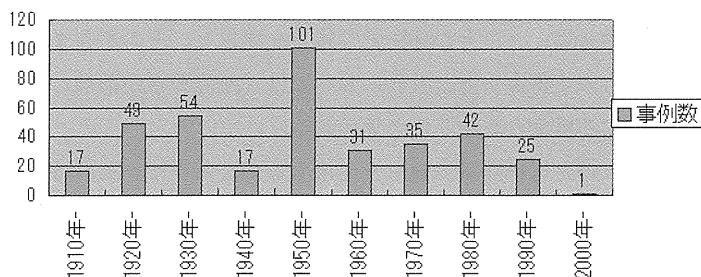


図2 近代口頭伝承にみる狐憑き事例数の年代分布

表5 近世・近代における狐憑き類型別の事例年代分布

	1800～20年代	1840～50年代	1920～30年代	1950年代	1980年代
A1型	15	8	4	5	1
A2型	13	2	9	6	2
A3型	12	7	21	43	18

単位：狐憑き事件数

1950年代の事例数は近代において最も集中していることが明らかになった。

前文に述べたように、近世の狐憑きは稲荷信仰の流行神としての側面に関係している。宮田氏が指摘したように、流行神は社会現象としては、次つぎに起こる。それも爆発的に生じる場合がある。一生懸命に信じている時は、ひたすら「苦しい時の神頼み」なのだが、客観的に見ると、やはりその背景に社会不安が根をはっているようである。社会経済的に逼迫している変革期に、より多く流行神が集中するからである。このことは、明治三十年代、昭和初期、そして第二次大戦直後の時代、そして現時点の世相にも通じている²³⁾。

昭和初期では、第一次大戦景気の反動による不況をはじめとして、震災恐慌、金融恐慌など経済的な苦境が続いた。第二次世界大戦における敗北による荒廃や混乱の中で、日本経済は1950年代の朝鮮戦争特需により1955年後半ごろには戦前の水準に復興し、更なる高度成長が始まった。1970年代から80年代まで、日本は、大きな危機、石油危機と円高ショックに直面した。

昭和初期、第二次大戦直後、石油危機の時代は、いずれも社会経済的に逼迫している変革期や社会不安が増大する時期であると考えられる。こういう時期に、狐憑きの報告事例が頻出している。吉田氏が指摘したように、憑き物の信仰は、病気、災い、不幸の説明に役立ち、村の規範や秩序を維持させてきて、対人間の恨み、妬み、反感などを軽減させる潤滑油として機能してきた²⁴⁾。狐憑き信仰も一種の憑き物信仰として、社会不安を軽減させる機能を持っているのだと考えられる。

昭和初期＝1920～30年代、第二次大戦直後の時代＝1950年代、現時点＝1970～80年代というように、妖怪DBからアプローチした本論の結果は、明治三十年代を除いて、宮田氏の結論とほぼ呼応するものになっている。

近世において、狐は稲荷と習合して、稲荷信仰として流行していたが、近代に入ると、稲荷信仰が廃れ、狐は憑き物信仰と習合して、社会不安の時期に狐憑き信仰として流行するようになったのだと推測される。狐信仰は人々の願望やその時どきの社会的ニーズによって、そのイメージや伝承も大きく変容してきたのだと考えられる。

4. おわりに

本論は、計量民俗学的な試みとして、妖怪DBを活用しながら、近世随筆と近代口頭伝承における狐憑きの類型と諸相を比較考察を行うことによって、以下のようなことを明らかにすることができた。

第一に、近代の狐憑きは、近世と同じく、西国よりも東国においてしばしば発生する。ただ

し、東国に発生する狐憑き事件は近世においてとくに江戸で多く発生するのに対して、近代には東京に偏らない。それは、近世資料の筆者の多数が江戸に居住するため、江戸での狐憑き事件が多く記載されたためである。近代口頭伝承の資料は全国の各地から採取されたものであるため、東京に偏らない。そのため、近世においても、江戸以外にも狐憑き事件が広く存在した可能性がある。

第二に、近世の資料に、狐が人の口を借りて稲荷祠の建立を要求する事件が数多く現れたが、その原因は、稲荷信仰が江戸という消費生活中心の都市型社会において、流行神としての性格を持っていたことにあると考えられる。近代に入ると、人びとが稲荷信仰に対する関心が減少するのにもなって、稲荷信仰が近世から近代へ引き継がれていく中で、流行神の性格が消え、廃れていったと考えられる。そこで、稲荷信仰が廃れるプロセスにおいて、口頭伝承の中で、狐が人の口を借りて不満を表す語りに変化したのだと考えられる。

第三に、近世において、狐は稲荷と結合して稲荷信仰として流行していたが、近代に入ると、稲荷信仰が廃れ、狐は憑き物信仰と結合して、社会不安の時期に狐憑き信仰として流行するようになったのだと考えられる。狐信仰は人々の願望やその時どきの社会的ニーズによって、そのイメージや伝承も大きく変容してきた。

本論では、中村禎里が提示した近世資料の分析項目を近代資料に援用し、近世随筆と近代口頭伝承の狐憑き事例の比較考察に重点をおいた。筆者が作成した近代資料のデータベースには、中村が近世資料の分析によって発見できなかった問題も含んでおり、それらについては今後の課題として引き続き検討していきたい。また本稿で割愛した問題として、狐憑き以外の近代における狐の伝承をめぐる考察があるが、これについても今後の課題としたい。

謝辞

本稿の作成にあたっては多くの方々から多岐にわたって御高配を賜った。とくに東京大学東洋文化研究所の菅豊先生にはさまざまな御指導をいただいた。また、国際日本文化研究センターの小松和彦先生、山田奨治先生、才津祐美子研究員には、「怪異・妖怪伝承データベース」の使用などについて、御配慮いただいた。調査に快く応じていただいた国際日本文化研究センター妖怪プロジェクト室の皆様も含め、ここに記して感謝の意を表する次第である。

参考文献

石塚尊俊

- 1990A 「憑きものと社会」(谷川健一編『憑きもの』日本民俗文化資料集成7、三一書房)
- 1990B 「憑きもの一解説」(谷川健一編『憑きもの』日本民俗文化資料集成7、三一書房)
- 1999[1959] 『日本の憑き物』、未来社

小松和彦

- 1979 「憑きもの」(『講座日本の民俗』7、有精堂出版)
- 1982 『憑きもの』、伝説と現代社
- 2000 「憑きもの解説」(小松和彦責任編集『憑きもの』怪異の民俗学1、河出書房新社)

- 中村禎里
 2001 『狐の日本史』 古代・中世編、日本エディタースクール出版部
 2003 『狐の日本史』 近世・近代編、日本エディタースクール出版部
- 速水保孝
 1999[1956] 『憑きもの持ち迷信—その歴史的考察』、明石書房
 1990 『狐持ち研究へ疑問』(谷川健一編『憑きもの』日本民俗文化資料集成7、三一書房)
- 星野五彦
 1995 『狐の文学史』、新典社
- 宮田登
 1993 『江戸のはやり神』ちくま学芸文庫、筑摩書房
 2006 『宮田登 日本を語る3：はやり神と民衆宗教』、吉川弘文館
- 柳田国男
 1948 「狐塚のこと」(『民間伝承』12巻11・12号、民間伝承の会)
 1949 「田の神の祭り方」(『民間伝承』13巻3・4・5号、民間伝承の会)
 1955 「ミサキ神考」(『日本民俗学』3巻1号、日本民俗学会)
 1969[1954] 「月曜通信」(『定本柳田国男集 第13巻』、筑摩書房)
 1970[1920] 「おとら狐の話」(『定本柳田国男集 第31巻』、筑摩書房)
 1998[1939] 『狐猿随筆』(『柳田国男全集』第10巻、筑摩書房)
 1999[1913] 「巫女考」(『柳田国男全集』第24巻、筑摩書房)
 1999[1914] 「毛坊主考」(『柳田国男全集』第24巻、筑摩書房)
- 山田奨治
 2006 「みえる狐、みえない狸」(小松和彦編『日本人の異界観』、せりか書房)
- 吉田禎吾
 1972 『日本の憑きもの』、中央公論社

注

- 1) 狐が人に憑く現象に関する最初の記載である景戒の『日本霊異記』巻下には、狐が復讐するために人に憑き、病人を取り殺したという話が記述されている。
- 2) 「怪異伝承データベース」は平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)「日本における怪異・怪談及び妖怪文化に関する総合的研究」(研究代表者：小松和彦・国際日本文化研究センター・教授)による研究成果、国際日本文化研究センターの平成13年度リーダーシップ支援経費、及び平成14～18年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「怪異伝承データベース」に基づいて作成されたものである。(URL：<http://www.nichibun.ac.jp/youkaidb/>)
- 3) 山田奨治「みえる狐、みえない狸」、小松和彦編『日本人の異界観』、せりか書房、2006年、68ページ。
- 4) 中村禎里『狐の日本史』近世・近代編、日本エディタースクール出版部、2003年、250～270ページ。
- 5) 妖怪DB(第1.4.3版)は2004年4月15日に更新されたバージョンである。2003年4月まで、16126件の怪異・妖怪伝承の事例データが収録されている。
- 6) 中村前掲書、251ページ。
- 7) A1型は、狐が自分の都合で人に憑いた類型である。狐が人から迫害を受けずに自ら人に憑いた事例はA1型に属す。例えば、近世の資料、『拾遺伽婢子』に稲荷社に鳥居の建立を要求するため、狐が飾屋の下男に憑いたという事例がある。また、近代の資料、『岡山民俗』通巻11号に食べ物が無いので、隣家の50歳ぐらいの婆さんに狐が憑いたという事例がある。
- 8) A2型は人から受けた迫害に対する報復のため、人に憑いた類型である。狐が人から迫害を受けたので、報復するために、人に憑いた事例はA2型に属す。例えば、近世の『老嫗茶話』に、狐に石を投げ、狐の足を痛めさせた農民が狐に憑かれ、熱病にかかったという事例がある。また、近代の『高志路』通巻21号に狐にあげのご馳走を少し食べた子供が狐に憑かれたという事例がある。

- 9) A3型はその他のケース、及び狐憑きの動機不明の場合の類型である。狐が人に憑く目的・原因が記載されていない、あるいは不明の事例はA3型に属する。例えば、近世の『安齋随筆』に次のような事例がある。

宿屋の娘は狐に取り憑かれ、半死半生の状態になったが、武士に飯綱の法で落として貰って治った。

また、近代の『郷土研究』1巻7号に次の事例がある。

27歳の未婚女性が狐に憑かれた。行者とその弟子が4時間半かけても狐は落ちなかった。再び祈禱をはじめ、般若心経を経文の末尾から繰り返し読み、狐憑きに向かって四方から矢を射続けた。すると狐が落ち、女はまもなくすっかり元気になった。

- 10) 中村前掲書、251ページ。
11) 中村前掲書、251ページ。
12) 中村前掲書、251ページ。
13) 宮田登『宮田登 日本を語る3：はやり神と民衆宗教』、吉川弘文館、2006年、212～213ページ。
14) 中村前掲書、258ページ。
15) 和田正州「甲州北都留郡の狐憑」、『山陰民俗』通巻3号、山陰民俗学会、1954年、13～16ページ。
16) 國學院大學民俗学研究会「新島」、『民俗探訪』昭和三十年度号、國學院大學民俗学研究会、1956年、65～85ページ。
17) 栗山一夫「下里村の民譚」、『旅と伝説』通巻31号、三元社、1930年、66～71ページ。
18) 湯浅典子「狐つきのことなど」、『岡山民俗』通巻35号、岡山民俗学会、1959年、7～8ページ。
笹谷良造「動物名義考(二)ータヌキ・キツネなど(1)ー」、『民俗』4巻3号、日本民家集落博物館、1960年、26～28ページ。
19) 小判繁樹「岡山の現代シャーマン(第2報)ー武下満子(こんがらさま)ー」、『岡山民俗』通巻147号、岡山民俗学会、1982年、1～2ページ。
畠山正寿「宮城の狐タカリ」、『民俗通巻』37号、相模民俗学会、1959年、6ページ。
20) 宮田登『江戸のはやり神』ちくま学芸文庫、筑摩書房、1993年。
21) 宮田登『宮田登 日本を語る3：はやり神と民衆宗教』、吉川弘文館、2006年、155ページ。
22) 中村前掲書、252～259ページ。近世のデータの中、最初に見られる事例は1703年前後成立した『元禄世間咄見聞集』の1件で、最後に見られる事例は1858年序『宮川舎漫筆』の1件と1858年記『安政午秋頃痢流行記』の2件、合計3件である。
23) 宮田登『宮田登 日本を語る3：はやり神と民衆宗教』、吉川弘文館、2006年、211ページ。
24) 吉田禎吾『日本の憑きもの』中央公論社、1972年、190～191ページ。

(原稿受理日 2012年9月18日)